

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第二部

第十二章

Foundation

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[12・Foundation](#)

[151.](#)

[152.](#)

[153.](#)

[154.](#)

[155.](#)

[156.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生
間宮宮司	ひろの父
マックス・ペイリー	古生物学を専攻する学生 健の友人

12・Foundation

151.

「詳しく知らないと言ってたが、きみ、よく知ってるじゃないか」

楡山はかぶりをふった。

「財団のホームページにそう書いてある。誰でも閲覧できるんです。オレが知りたいのは、もっと……！ オレは代理人を立てていることになっていて内部に入れたい。しかし代理人はオレがいずれ引き継ぐことを要求している！ オレと財団を関連づけて宮司に話したという事はそういう事なんだ！ どうしろというんだ！ という気持ちになるんですよ！」

「ま、まあ落ち着いてくれたまえ……」

「ああすみません……財団の支援で世に出た人たちというのは実に広範囲の分野におよぶんです。科学者、文学者、アーティスト、アスリートetc……現在どの分野でも彼ら、彼女らが第一線で活躍している。そういった人材を見出し支援する側の人間にもそれなりのレベルが要求されるんだ。今のオレにはどうも務まらない、とは頭ではわかるんです……わかるんですが」

ひろがとつぜん「あ」と声をあげた。「おかあさん！ あたしが送った宅配便は！？」

「あなたの荷物なら今朝届いたわよ、となりの部屋に――」

「なんだね！ 健君が話してるときに！」

ひろは「ごめんなさい！」といいながらテーブルをがたがたいわせて応接間を出て行ってしまった。となりの部屋でダンボール箱からガムテープをはがす音を派手にたてている。

「まったくもう！」宮司は小声でがさつ者め、といい、

「お茶、淹れなおしますわね」間宮夫人が立ち上がりかけたところへひろが戻ってきてテーブルに封筒を置いた。

「見て」

ちょっと見慣れない大きさの封筒で、クリップで名刺が留められている。クリップもちょっと見慣れない形のものだ。

「なんだね、いったい」

「これ、インターハイの表彰式のあとで……もらったの。『H&L』って、書いてない？」

楡山はつと手をのばして封筒を取り上げた。名刺のすみには飾り文字の銀箔が控えめに押さ
れていて、H&Lと読める。「もらった……って、誰から？」

「女子二百位の表彰式のあと、呼び止められて……外国人だったわ。ごめんなさい！ まさか、
あなたと関係があったなんて知らなかった！ それにずっとばたばたしてて、すっかり忘れてたの
よ！」

「……どんな人だった？」

封筒は宮司に渡し、名刺をはずしてまじまじと見ている。「この、アルベルト・フォン・ラウレンス
三世という人物」

「え……と、そうね、背が高く、黒ぶちのめがねをかけてて……とても、優しそうなひとだったわ。
そのひとにね、ミス・マミヤ、って呼び止められたの」

「それで？」

「それを渡されたの」

「なにか話した？」

「ううん、そのひと、日本語でひとこと言っただけ。“また会いましょう、って”

「また会いましょう、か……」

宮司が封筒から取り出した文書を渡してきた。げっそりとした顔だ。文面は英文だったのだ。楡
山はそれにざっと目を通した。

「公開されてるホームページの内容と同じ、設立趣旨をのべただけのものです……ですが……ア
ルベルト・フォン・ラウレンス氏は、財団のトップ、選考の最終決定権を持っている人です」

「……と、いうと？」

「……ひろ」

「はい？」

「おまえは、H&L財団にスカウトされたんだ」

ラウレンス氏にはそういう権限がある。いや、それが彼の仕事なのだ。無数の人間の中から才能のきらめきを見つけ出す、それが彼の才能でもある。

「まるで、超能力だね！ ひろはその人の目にかなったということか」

H&LのLの方は人材を発掘し、Hの方はその人間の才能を育てるのに必要な資金をまかなう、というのが簡単な図式だ。だが、財団の存在を偶然知ったものの、オレは今、自分がどうすればいいのか、皆目見当がつかない。

ウィリアムス弁護士は若手弁護士たちの間で“ナスダック、と仇名されるほど経済に明るい。財団の財務担当がきっちりその役目をこなせるようになるまで、彼は仕事を肩代わりしてくれている、たいへんありがたい存在だ。しかし質問してすぐに答えをくれるやさしい人間ではない。答えは自分でみつけるのだと、オレは突き放された。

——偶然知ることがなければ、ひょっとして一生財団のことを知らなかったのではないか、とオレは疑った。

話は前後するのだが——レルのやつがH&Lのエージェントの名刺を持っていた、そう話すと、ひろは、えっ、と目を瞠った。

お彼岸でこっちへ来て、レルも合流して(予定外だった！)、帰る時は同じ便だったんだが、やつはオーストラリアへ帰らずにシンガポールで飛行機を降りた。

うちへ帰って荷物を整理しているときに、やつに貸したパーカーのポケットに名刺が紛れ込んでいるのをみつけて、それを見た時は、H&Lの何たるかを知らなかったものだから、何も考えずにレルに送り返してしまった。あいつ、外科医志望の医学生なんだよ。十五でヘルシンキ大を卒業して、十六でオーストラリアのモナシュ大へ来てたんだ。年齢と実務経験の少なさが災いして現場で働けないっただけで、神童もいいところさ。H&Lの目にとまるのは時間の問題だったんだ。

そして、彼が持っていたH&Lエージェントの名刺の人物……パウジーニさんて名だ……、オレは以前この人に会ったことがあった。それもレルつながりで。一応アドレスを交換してるから、この人に連絡とることもできた。けど、エージェントが接触したのはレル・ヴァリスであって、オレじゃないんだよな。

そんなことをもやもやと思い悩んで、思い切って財団本部へ電話してみた。

ラウレンス氏に直接会ってみよう。彼は五十年前に財団を立ち上げたアルベルト・フォン・ラウレンスの子孫だ。代々同じ名前なんだ。

今、どこにいるのか――

問い合わせると、彼は業務のため不在だという。連絡先とか出張先を教えてもらえないかと粘ると、名を名乗れ、と相手の男が電話口で丁重に言った。「フルネームを教えろ」と。

仕方なくそうすると、電話口の男はしばらく間をおいた挙句、部外者には教えられない、と言いやがった！ くそ！ 覚えてろ！

オレが礼を言って電話を切ろうとすると、相手がすばやく、こう言った。「総裁！」それからこっそりとささやいた。「ラウレンス先生はテキサス州ダラスにいらっしゃいます」

それがひと月前のことだ。「総裁！」と呼び止められたことも気になったが、それよりはもう、その『ラウレンス先生』に会わずにいられない気持ちになっていて、矢も盾もたまらずダラスへ飛んで――

空港で――ぱったりと、友人と顔を合わせてしまった。そいつはペイリーというんだが……放っておいたり無視したりできないワケがあつて……

(放置できなかったのは、こいつには一万ドル近く貸してあるからだ)

言い淀むと、ひろがさらりと助け舟を出してくれた。

「ラウレンス先生には会えなかったのね？」

結局、そういうことだ。せっかく居場所を教えてもらったのに、オレはそいつといっしょに何日かダラスを離れなきゃならなかった。

もらったチャンスを生かせないということは――縁がなかったということなんだろうと、納得するしかなかった。で、ふと気がついた。今日は何日だ？ ダラスから日本まで、12時間で飛べる。インターハイに間に合うんじゃないかって。

「ひろや、二百の決勝の日にその人に逢ったと言ったね。惜しいことしたね、桧山くん」

「なに、なにが惜しいの？ お父さん」

間宮宮司と桧山は思わず、顔を見合わせた。

「なんなの？ 桧山さん！」

153.

ひろは疑わしい目でふたりを見比べた。「そういえばさっきもなんか言ってた！ 『その節は』どうしたこうしたって！ ふたりの間に何があるの！？」

「べっ、別になんにもないよ！ ねえお義父さん！」

「そっ、そうとも！ なあ健君！」

「なにが『ねえお義父さん！』『なあ健君！』よ！！ ふたりはいつの間にそういう仲になっちゃったのよ！！」

「いつの間に……うむ、あれはこないだのインターハイの時だ……私はあの時……」

「お義父さん！ 遠い目で回想に入らないでください！」

「あら、ひろは知らないかもしれないわ、あのね お父さんたらあなたの百を見に行って会場で転んじやって！」

「え——」

「偶然桧山さんが近くにいらっしゃって、助けてくださったのよ」

「うそ——お父さん転んだの？ 桧山さん見に来てくれたの？ ふたりともなんで私に教えてくれないのよ！？」

「う、いい大人が転んだなんて、はずかしくて言えるか！ 母さんもそういうことは黙ってなさい！」

「出番もセリフも少ないんですよ、私！ 少しはしゃべらせてくれたっていいでしょ！」

「オレはさっきの話の続きだけど、日本へ来たのはほんとに偶然だったんだ。ダラスの空港で途方にくれてる時にインターハイのこと思い出して——うまい具合に翌朝成田に着く便があって——スタジアムでぐうぜんお義父さんを見かけて——黙っててわるかったよ」

「そうだったの……インターハイではホント、たくさんの人たちがサポートしてくれたのよね、そのうえ楡山さんも来てくれたなんて……」

目をつりあげていたひろの表情がすこしずつ、やわらいできた。

「みんなに支えられて、自己ベストで締めくくれたなんて、出来すぎよね。でももう思い残すことはないわ、私の陸上はこれでおしまい」

みんななんとなく黙ってしまった。ひろを除いた三人の目はテーブル上の英文書を見ている。

「ほんとにおしまいでいいのか、ひろ」楡山が口を開いた。

「H&L財団は世間にはほとんど知られていないが実績は確かだ。もし……もし、スカウトに応じるならおまえは確実に世界の舞台上で活躍できるランナーになれる」

「う……む、インターハイの成績からすれば、あちこちのクラブチームや大学から誘いが来るとも確実ではあるんだな。しかしH&Lは……日本国内のクラブチームや大学とはスケールがちがうようだ。それでも、それらをぜんぶ、断る覚悟が、おまえにはあるのか？」

「そうよ、ひろ。高校総体どころかオリンピックや世界陸上だって夢じゃないのよ！」

楡山は名刺をつと裏返した。そこにラフな筆跡で数字がいくつも並んでいた。おそらくラウレンス氏の連絡先。(この名刺があれば——)

「私ね……」とひろが言う。

「走る前にいろいろ考えたの、考えずにいられなかった。そしたらね、キャプテンが言ったの、私たちは情熱を燃やすために走るんだって。私、ああ、って胸落ちしたわ。体が熱くなって、心の奥底から熱くなって、全身が火みたいになる、あの瞬間が好きだから走るんだわ。理由も大義名分も要らないのよ」

楡山は喉から手が出るほど欲しいその名刺をしばらくじっとみていたが、文書の上に重ねて置いた。それはひろに宛てられたものなのだ。

「……おまえがラウレンス氏の目にとまったわけがわかる気がする」

彼はひくくそう言った。財団が掲げている理念は最初仰々しいとも思えたが、たった今ひろが言ったこと、そのままなのではないか――

彼にはそういう経験の記憶も自覚も存在しなかった。

ウィリアムス弁護士が財団のことをなにひとつ教えなかったこと、アメリカまで追いかけたラウレンス氏に会えなかったこと、ひろにそのラウレンス氏から声がかかっていたこと、財団との関わりをすべて拒否されたように見え、楡山は寂寥感に体が冷たくなるのを覚えた。

「インターハイが終わってから私、走りたいって思えなくなっちゃったの。きっと燃やしつくしちゃったんだと思うのね。遣り残したことも後悔も、なんにもない」ひろの声は静かだった。

「……うむ、健君、きみもそう感じたから最後の二百の決勝を見ずに帰ったのではないのかね？」

「しかし――！ ひろ、財団の人間の口ぶりでは、ラウレンス氏のスカウトなんてそうあるものじゃないそうだ」

「私は楡山さんについて行く。あなたといっしょにいれば、またラウレンスさんに会うことになるわ。そうでしょう？」

154.

「あのひと――とても優しそうなひとだった。大きな団体のお偉いさんなんかには見えなかった。懐が深そうで、包容力がありそうな雰囲気、目が明るくてきれいで……それでいてごく普通のひとにみえた。とても、印象的なひと」

ひろのラウレンス氏評を楡山は黙って聞いていた。内心、オレとは大違いだ、と思った。

「一度会ったら、ちょっと忘れられないひとだわ。私、もう一度、あのひとに会いたい！」

手の甲に暖かいものを感じた。ひろの手だ。

「いっしょに……」

思わず目を見開いて、桧山はひろを見た。ひろの手の平から伝わってくるのは体温以上のもので、彼は体がふわっと浮上する感覚を覚えた。

「あーごほん」

間宮宮司がわざとらしい咳ばらいで若いふたりの間に一瞬漂ったロマンチックなムードを台無しにした。

「あーすまんがきみたち。私すっかり忘れとったよ。今夜縁日だった」

ここは神社の一画だ。境内に屋台が立ち並び、人がわんさか集まってくる、と宮司は説明した。言われてみれば外で人声がする。日はまだ高いが準備はすでに始まっているようだ。間宮夫人は、あらたいへん、ちょっと見てきますわ、と短いセリフを残して行ってしまった。

「あーそういうわけで健君、きみの車もう出られないよ」

駐車場を見にいってみると本当に縁日関係者の車で前後左右固められてしまってトランクも開けられない始末だった。間宮宮司はとぼけた顔で、ゆっくりしていつくれたまえ、と言った。

*

縁日自体は風情があっても舞台裏は風情もへったくれもない。涼を求め、ロマンを期待してやってくる人々の熱気で騒々しいだけだ。落ち着かなくてごめんね、とひろはすまなさそうに言った。

「おまえ、行ってきたら？」とすすめると、「うん」と首を横に振った。

「お父さんたらねえ、近所の人に私のこと、相当吹聴したらしいの」

「ああ、インターハイのこと？」

「うん。縁日には地元の人たくさん来るし、そんなとこへ顔だしたら……」

桧山は笑った。「有名人はつらいな！」

「ねえ桧山さん」

「ん？」

「今夜、泊まってって」

「——おまえ思い切ったこと言うなあ——」

「あら駐車場空くの、夜中、ヘタすれば明け方よ。そんな時間に帰るの？」

「それはそうだけど」

「ね？」

「……わかった。そうさせてもらう」

155.

レルの話が出たついでだ、一万ドルを貸してあるペイリーのことを話しておこう。ペイリーファンの方々も彼の動向を心配しておられようから。

——矢も盾もたまらずダラスへ飛んで——空港の人混みの中で——ばったりと、友人と顔を合わせてしまった。

「ヒヤマじゃないか！？」

「マックス・ペイリー！？」

*

「ブラジルにいたんじゃないのか？」

「それどころじゃないんだ！！」

ペイリーはひどく興奮していた。滅多にない半生(ほんなま)の翼竜の化石が、それどころじゃないとは。

「見た奴がいるんだ！ 本物を！ 化石どころの話じゃないんだよ！！」

「落ち着いて話せ。いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように見たんだ？」

「ええい、5W1Hやってる場合か！！ ケツアルコアトルスだ、ケツアルコアトルス！！ 史上最大の翼竜だ！！ 本物を見たという目撃情報があるんだ！！」

ケツアルコアトルスという名のついた翼竜の化石は、1971年、米国テキサス州西部の白亜紀の地層から発見された。

白亜紀、北米大陸は現在のロッキー山脈を境に東西に分かれていた。東がアパラチア大陸、西がアラミディア大陸、その間に西部内陸海路(せいぶないりくかいろ)という内海が広がっていた。幅はおよそ1000km、長さはおおよそ3200km、北は北氷洋、南はメキシコ湾にまで及んでいた。第四章№99の内容と被るが、当時メキシコ湾はテチス海の一部だった。テチス海同様、西部内陸海路にも海中に分厚い地層を形成するほど海の生物が繁殖し、空の生き物が飛び交っていたはずだ。ケツアルコアトルスの化石が掘り出されたのはそういう地域だった。

「それにしたって——その翼竜が生きて、空を飛んでいたっていいのか？ このご時世に？」

「そうなんだよ信じられんだろう！？ けど確かに見たって奴がいるんだ、そいつとここで待ち合わせてるってわけさ！」

しかし、待てど暮らせど、その、本物を見たという奴がやって来ない。待ち合わせ場所で二日待った。気の毒にペイリーは落胆して見る影もない。オレはラウレンス先生を追いかけるのを脇に押しやって、ペイリーに言った。「連絡もなく約束を破るやつは相手にするな」「あきらめろ」「ここまで来たんだから、その翼竜が最初に発掘されたところへ行ってみよう」

ところが——翼竜の化石が最初に発掘されたのは同じテキサス州の、ビッグ・ベンド国立公園¹の奥にあるらしいのだが、公園自体がとんでもなく交通環境不便なところで、さらに、発掘場所にたどり着くのは至難のわざだという。

だが、ケツアルコアトルス発掘場所といえばペイリーにとって聖地。国内線と車を使って公園まで同行するうち彼はすっかり元気を取り戻した。よくしたもので、ペイリーと同じ動機でビッグ・ベンドへやって来たグループがいて、ペイリーはすぐさま彼らに馴染んでしまった。さすがに古生物学者のたまごたちのテンションには付き合いきれなくなって、わるいがペイリーを置いてきた。あとは彼ら自身がなんとかするだろう。

ひろの中学時代の地図帳を捲りながら話し続けた。

「それで……ラウレンス先生とは会えなかったわけね？」

「うん。まあ、無謀だった」

¹ビッグ・ベンド国立公園は3,300平方キロメートル。東京都がすっぽり収まって余りある広さ。

「ねえ、ひょっとして、先生、そのペイリーさんをターゲットにしてたんじゃ……」

「ああ、それは、たぶんない。財団の支援対象者には十六歳から二十二歳までっていう、年齢制限があるんだ。ペイリーは二十五歳」

「あ……そうなの」

「あと、財団関係者は対象外というのもある。……まぜっかえすことになるが、ひろ……」

「あたしの気持ちは変わりません。ねえ、こんどまぜっかえしたらあなたのこと嫌いになるわよ」

ひろはなんとなくうわの空の口調で言いながら目は地図を見ていた。ビッグ・バンド国立公園だという地域からそう離れていないところに『ホワイトサンズ』という地名。「サンズはサンド、砂だ。白い砂」と、桧山。

ふっと、ひろは眼前に地平線の向こうまで真っ白な大地が広がる光景を見た。どこまでも白い世界。なにもない。足元がぬかるんでいるのは前夜の雨のせいだ。ぬかるみに足を取られながら、歩いたっけ……ふたりで……

ふたりで？ 誰だっけ？ あ……

そのひとの名が喉元まで出かかったが、ひとつまばたきする間に、消えてしまった。白い光景も、知っていたはずの名も。次の瞬間にはその白い大地を上から見ていた。ひろは、自分が乗っているのが翼竜の体の上だと知っていた――

*

「オレ、今年大学卒業するつもりでいたけど」と桧山は言った。「ちょっと無理みたいだ」

「……」

「むこうの大学は日本とちがって一般教養課程ってのがないんだ。いきなり専門課程から入って三年間やる。それを途中から編入して一年でなんとかしようってのは甘かった。――ウィリアムスにもそれみたことかと言われたよ！――この際、腰を据えて、仕事を調整して、じっくりやろうと思うんだ。大学院も考えてる。――ラウレンス氏とコンタクトがとれないということは結局、オレに

力が足りないからだ。ある程度のレベルまでいって始めて開く扉っていうかな、RPGみたいだけど、十年早かってそういうことじゃないかな」

彼の黒い瞳がしだいに奥の方から光を放ってくるのをみてひろはどきどきした。

「十年……そんなにかげられない、五年だ！ 五年たったらオレはもう一度ラウレンス氏に会いに行く！ その時はいっしょに行こう！」

輝く黒い目にみつめられて胸がいっぱいになる。

「……だから、オレは当分学生のままだ。でもおまえは高校、ちゃんと卒業しろよ。まだ半年近くあるだろ？ インターハイで大会記録ふたつも出したやつを高校中退で外国へ連れてくなんて、さすがに抵抗があるからな」

156.

早朝の境内の石畳の上に立ち、両手を思い切り上に向かって伸ばして空気を吸い込む。杜の精気が流れ込んできて全身にゆっくりと広がっていく感じ。体中の細胞が少しずつ目をさましてくるのがわかる。

「……ああ！……」ひろは歓声をあげた。

「気持ちいい……！」なんだか深呼吸を繰り返して、軽いジャンプで足慣らしすると桧山の目の前でポニーテールがはねた。「……いって来ます！」彼をちょっと振り返ってひろは走り出した。そしてあっという間に境内の階段の下へ消えてしまった。

ひろのロードワークを見送ってから桧山は鳥居の方へ歩いた。間宮宮司が竹箒片手にとぼけた顔で立っていて、やあ、と声をかけてきた。

「ずいぶん早いんだねえ！」

「宮司こそ」

「日の出時の杜は力があふれているからね、少し分けてもらうのだ」

「ああ、ひろもおなじことを言っていました」

間宮宮司はちょっと笑った。「そうだなあ、あれの陸上の出発点はここだからねえ……まあ、走
ることをやめるわけにはいかんだろうさ、あれにとっては呼吸するのと同じことだ」

「……宮司」

「うん？」

「タベ、一晩、ひろと話しました。これまでのこと、これからのこと……」

「……うん」

「正直なところ、互いに不安がないわけじゃない。でも気持ちはかわらない、と……」

「……………」

「間宮さん……お嬢さんと、結婚させてください」

「……なあ、きみ」

「は」

「あれが、ひろが、『いい』というなら、連れて行けばいい」

「ひろは、そうは言わないでしょう」

「……そうだろうか」

「ええ。彼女はそういうことができない性格です。だから高校生にもかかわらず一人暮らしをさせ
ておいたのではないんですか？」

「……あれは私が反対すればあきらめるだろう。私の意思など確かめる時間があつたらふたり
いっしょに飛行機に乗るのが利口ではないかね？ きみにならざるはずだ」

「やろうと思えばできるでしょう。しかし宮司、ご自分で言ったじゃないですか。彼女の源泉はここ
だと。強引に引き抜けば彼女は枯れてしまう」

「……………」

ふっと会話が途切れたところへ軽い足音が聞こえた。境内の階段をひろが駆け上がってくる。立ち話をしている桧山と父親をみつけてちょっと首をかしげた。

「どうしたんだ、忘れ物か？」ひろはううん、と首を振った。呼吸はいたって普通、ろくに走らずに戻ってきたようだ。

「走ってたら……不安になって……」

「……なにが？」

「私がいないうちに桧山さん、いなくなっちゃうような気がして……いつも……急に行っちゃう人だもん」

彼が片方の唇をぎゅっともちあげるのをひろはまぶしそうな目で見、宮司はとぼけた顔であらぬ方をながめながら言った。

「今彼に口説かれてたところだ。父さんが返事するまで、彼は帰らんよ」

「そういうこと」桧山はそう言って、ひろから預かっていたタオルを手渡した。

「さて！ それじゃあ、朝飯にしよう朝飯！ そのあとでいい、ひろは父さんの部屋へ来なさい」

あとがき

『Salamander in ～』第八章のNo.135、マミヤは翼竜に乗って北米大陸から南へ向かいます。この途中でホワイトサンズの端っこで雨宿り、雨上がりの柔らかい岩場で足跡つけたりなんかして。

このあたりは本編で言及してる西部内陸海路だったところで、かつては翼竜が飛び交ってたところだった。筆者はじつはケツアルコアトルスの最初の化石の発見場所がアメリカテキサス州だったこと知りませんでした。今回書きながら「え”え”え””と、のけぞった次第です。ペイリーさんが、本物のケツアルコアトルスを拝みにどーしてもテキサスへ行きたい！！ とごねて主張してくれたおかげです。

2025年4月10日 記

奥付

リ・コンストラクション

第十二章 Foundation

2025年 4月15日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社